

# 国語科授業づくり講座 ～A「話すこと・聞くこと」(話し合うこと)～



本年度は、香南市立野市小学校を会場校に、A「話すこと・聞くこと」(話し合うこと)の授業づくりについて研究しました(9月15日教材研究会、11月12日授業研究会)。

【提案授業】 単元名：「なわとび大会に向けて学級の合い言葉をきめよう」  
学習材：「グループの合い言葉をきめよう」東京書籍3年上  
言語活動：話し合いの目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点に着目して考えをまとめる。(A話し合うこと 言語活動例ウ)

【野市小学校の提案】  
★単元導入時に学級会を想起させ、話し合い活動で困っていることを明らかにすることで学習に対する必然性をもたせる。  
★話し合いに必要なことを教科書教材で正確に理解させ(2・3時間目)、理解したことをすぐに話し合い活動で使わせる(5・6時間目)ことで、「分かる」から「できる」という実感をもたせる。

【単元の計画】 **ポイント** 他教科等とも関連を図り、理想とのズラから課題を意識し問いをもたせることで、話し合いや学習の必然性を感じさせます。必然性のある学びは、主体的な学びにつながります。

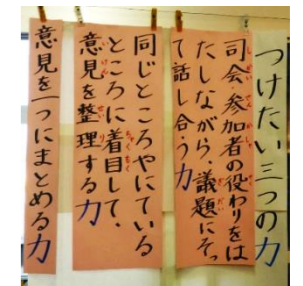
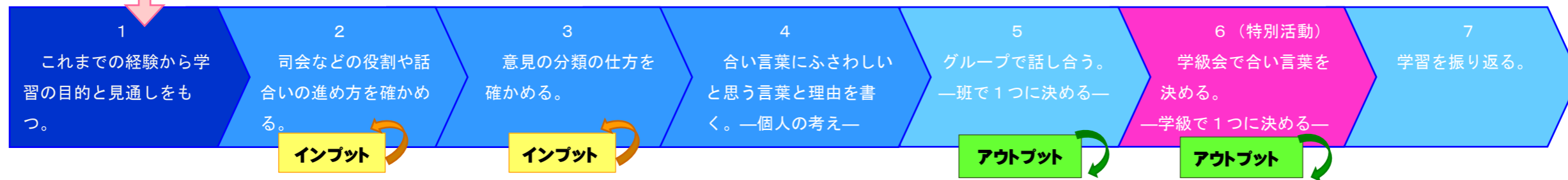


写真1：単元でつけたい力(教室掲示)

## 1. 言語活動の充実《付けたい力を具体的に》

資質・能力ベースの授業づくりをするうえで、学習者である児童が、これから取り組む言語活動について活動の必然性を感じ、学習内容について自覚的に取り組むことが重要です。つまり、児童自身が、何のためにその活動をするのか、その活動をすることによって、どのような力を身に付けようとしているのかを意識しながら学習に取り組むということです。そのため、教師側は学習指導要領に示された内容と児童の実態から付けたい力を具体的に、実生活に即した言語活動を設定して提示することが必要です。

付けたい力を具体的にするには、学習指導要領解説と教科書の内容を関連付けながら読み解くことで指導内容が明確になってきます。国語科の学習指導要領に示されている指導事項は、2学年を通して指導するものです。児童がこれまでの学習で身に付けている力や学校の取組などと照らし合わせて、適切な目標を設定しましょう。

一般的な話し合いの場面では、互いの意見を聞きながら思考していくことが求められます。しかし、限られた授業時数の中だけで定着させることは難しいです。今回学んだ、話し合いに必要な司会などの役割や合意形成の方法を、今後、学級会や日常生活の中で発揮しながら確かな力にしていくことが期待されます。そのためには、児童が習得したことを繰り返し使えるよう、意図的に場を設定したり教室環境を工夫したりするなど、継続的、横断的な指導を意識することが必要です。

**ポイント** 見方・考え方を働かせるためには、相手や目的を設定した言語活動にすることがポイントです。それらを設定することで、言葉を吟味する必要性が生まれます。また、児童が行う言語活動を授業者が実際にやってみることで、そのときに働く見方・考え方をイメージしやすくなります。

## 2. 見方・考え方を働かせる《明示的に指導する》

野市小学校は、児童と学校の実態に即して、「話し合いにおける進め方や役割を理解し、使うこと」と「合意形成に向けた方法の一つを理解すること」を本単元で目指しました。児童は、3時間目に教科書教材を使って右の順にまとめる方法を学習しました。指導するうえで、互いの考えを比較する際にどのようなことを考えながら検討すると出された意見を整理することができるのかを捉えさせるよう、明示的に指導することがポイントになります。また、「話すこと・聞くこと」領域の既習事項である、相手に分かりやすく伝える話し方や相手の話を正確に捉える聞き方を活用させながら鍛えていくことが必要です。※「能力ベースの授業づくり」P50、51 参照

- ① 同じ言葉や似ている言葉にサイドラインを引く。《可視化》
- ② ①を基に仲間分けをする。《可視化》
- ③ 使いたい合い言葉を選ぶ。
- ④ 付け足したい言葉があれば意見を出す。
- ⑤ 一つにまとめる。

本単元で用いた意見の一つにまとめる方法

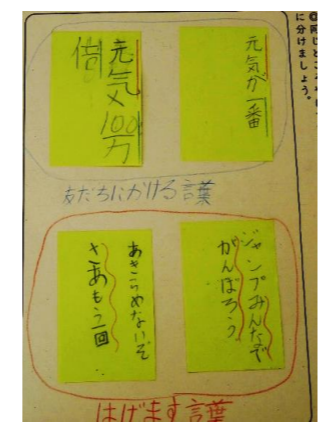


写真2：意見を整理する(個人思考)

## 3. 新しい評価の在り方について

本講座では、教材研究会の際に講師である松永 立志 先生(元 鎌倉女子大学准教授)より、「見えるようにしよう(可視化)」をテーマにご講演いただきました。その中から、新しい評価の在り方についてお話いただいたことを紹介します。

講話資料より抜粋

- ◆ [知識及び技能] [思考力・判断力・表現力等] …観念に沿って、ほぼ従来通り評価する。ポイントは、インプット(教える→理解・吸収)とアウトプット(考えさせる→表現・説明・討論)を意識して評価すること。
- ◆ [学びに向かう力・人間性等] …従来の関心・意欲・態度の評価から転換する。「主体的に学習に取り組む態度」は、「学習の自己調整力」として評価する。
  - 学習の自己調整力とは(例)—
    - ①習得→活用→探求のサイクルを回す力や能力
    - ②問題解決のサイクルを回す力や能力
    - ③資料情報活用のサイクルを回す力や能力
    - ④学習のPDCAサイクルを回す力や能力
    - ⑤予習→授業→復習のサイクルを回す力や能力
  - これからの評価に必要な不可欠なもの—
    - ・自分の理解状況・学習状況を自己診断する「メタ認知力」
    - ・子供が学習に主体的・積極的に取り組む「意思・意図」
    - ・その「意思や意図」が反映された「個人のめあて」と「主体的な振り返り」
    - ・「必要性・必然性」に裏打ちされた「対話・交流」と、その「Before と After」
    - ・音声言語の学習においては「録音・録画機器」の活用